

歴史的遺産の「まちづくり」への応用から学ぶ

—津和野、萩、石見銀山を巡るフィールドトリップ、
平成22(2010)年度「地理学特講(地理学臨地実習)」の覚え書き—

香川 貴志

(京都教育大学)

Learning from the Application of Historical Heritage for the City and Town Planning:
A Memorandum of Extensive Field Trip in Tsuwano, Hagi and Omori (Iwami Silver Mine)

Takashi KAGAWA

2010年11月30日受理

抄録：本論文は、筆者が偶数年に担当している表題科目群について、その実施内容を備忘録としてまとめたものである。これまでの香川(2003、2005、2007、2009、2010)と同様に、授業内容を簡潔に書き残しておくことで、今後同様の授業を設計する際、コース立案や授業実施に向けて多くの示唆を与え得る資料となる。臨時的に昨年度開講した同じ科目群が、松山市街地を対象としたインテンシブ・フィールドトリップであったのに対し、今年度は表題の3箇所を巡るエクステンシブ・フィールドトリップとした。

キーワード：フィールドトリップ、景観保全、歴史的遺産、津和野、萩、石見銀山

I. 本稿の目的と現地実習地域の選定

本稿の目的は、数回の事前学習とフィールドでの現地行動からなる集中実施科目について、その運営実態を記録することにある。過去に残した記録(香川2003、2005、2007、2009、2010)と同様、運営にあたって明らかになった反省点を以後の礎にするのがこの記録の意義であり、それが授業内容の改善に大きく貢献してきた。

ところで、本授業科目は原則的に偶数年に実施される隔年開講科目である。平成21(2009)年度は、奇数年でありながら、改組にともなう移行措置として開講したが、今年度から通常の偶数年開講になった。ただ、改組前にあたる平成17(2005)年度以前の入学者が一部在学しているため、開講科目の名称は現在の「地理学特講」だけでなく、旧課程在学者向けに「地理学臨地実習」と「地域環境学臨地実習」も設置している。この措置も今年度が最終となる。また、事前学習は学部のものとは異なっているが、大学院設置科目の「人文地理学特論」も現地では同日程で行動する。これは旧稿にも記したが、在学生の大多数が初等・中等教育教員を目指す本学大学院教科教育専攻社会科教育専修の実情を鑑みて、彼らが教育現場に出た場合の校外学習や修学旅行の立案や実施の練習とした配慮である。受講する大学院生には、都合が付く限り学部の事前学習会にオブザーバーとして出席してもらい、それとは別に時間を確保して、大学院独自の事前学習、そして資料収集などの準備に関わる指示をしている。

今年度の現地実習地域は、これまでの経緯を踏まえて、当初よりエクステンシブ・フィールドトリップを企画した。すなわち、平成14(2002)年度が浅草から渋谷までの東京をフィールドにしたインテンシブ、平成16(2004)年度が日高・札幌・小樽をめぐるエクステンシブ、平成18(2006)年度が長崎市街地を対象としたインテンシブ、平成20(2008)年度が道南を広域に巡るエクステンシブ、臨時措置として開講した平成21(2009)年度が松山市街地を巡るインテンシブであったため、交互にエクステンシブとインテンシブを繰り返す順からすれば、今年度がエクステンシブで行う年度にあたるからである。

こうした企画のもと、著者にとっては初めての試みとして、前年度の大学院教科教育専攻社会科教育専修における後期開講科目「社会科教育特別演習Ⅳ(地理分野)」で、今回の津和野・萩・石見銀山を巡るコースの一部を同科目の現地実習に組み込んで、今回の下見を兼ねたフィールドトリップを実施した。「社会科教育特別演習

IV (地理分野)」は、大学入試における地形図読図に関する過去問題を題材として、解答・解説および作問演習を行う実習形式で実施している。その現地実習では、あらかじめ対象地域の2万5千分の1地形図を与えておき、作問された設問群を現地での観察結果と合わせて相互批評しているため、今回の開講科目の純然たる下見にはならない。しかし、翌年実施の科目(当科目)の集合場所、駅のコインロッカーの数や位置、バス停留所の位置、昼食を摂る場所の選定、徒歩移動時の所要時間など、計り知れない有益な情報を得ることができた。もっとも、「社会科教育特別演習IV (地理分野)」の現地実習は1泊2日の行程であるため、今回の対象地域から津和野を省いた萩および石見銀山で実施した。津和野については、昨冬の実施時に前泊した著者が事前に現地調査を済ませておいた。

II. 予備登録、受講登録、事前学習会の設定と実施

ここ数年、当授業科目の登録は、シラバス記載事項に従って予備登録を行い、受講希望者が人数超過した場合は上回生を優先するなどの選別の後、教務課に受講許可学生を届け出るという手順を踏んでいる。今回は同時開講の学部向け3科目で30人の定員を設定していたが、予備登録の段階で受講希望者が定員を超過しなかった。そこで、全員の受講を認め、可能な限り「教員養成セミナー」などの学内諸行事と重複しないように配慮しながら事前学習会を設定した。希望者全員が受講できること、事前学習会の日程と場所は、地理学研究室の掲示板で知らせた。その後、数名のキャンセルと追加登録希望者が生じたが、その出入りが沈静化した5月10日(月)に受講学生を確定し、教務課に名簿を提出した。

受講学生は、旧課程の「地理学臨地実習」が6回生男子2名、同じく旧課程の「地域環境学臨地実習」が0名、新課程(平成18年度以降入学者)の「地理学特講」が、3回生男子4名、3回生女子5名、2回生男子3名、短期留学特別聴講学生女子1名で、学部開設3科目の合計で15名となった。事前学習会や現地での行動目的が異なる大学院「人文地理学特論」は、例年になく受講希望学生が多く、修士3回生女子2名、修士2回生女子1名、修士1回生男子2名、修士1回生女子4名で、大学院生は9名に達した。

事前学習会は、受講学生の数を勘案して4回を設定した。日程は、5月12日、6月9日、7月14日、7月28日で全て水曜日の3時限と4時限である。水曜午後は毎週開講の通常授業が設定されていないが、「教員養成セミナー」などの諸行事が重複しやすいため、日程のインターバルに長さの違いがある。このように工夫して事前学習会を設定しても、教育実習や就職関連の諸行事などを避けることが出来ず、結局のところ事前学習会の各回において受講学生の全員が出席することはなかった。教員養成系大学の宿命とはいえ、事前学習の出席回数が少ない者には別に課題を与える必要もあるため、成績管理に骨が折れる。事前学習会が不規則実施であるため、研究室の掲示板で実施日時を告示しているとはいえ、失念して欠席する受講学生もいて、欠席理由を事前にEメールで届けさせるなどの改善が必要であると感じている。また、事前学習会を進めていく過程で若干のキャンセルが生じた。そのため、最終的な受講学生は、「地理学臨地実習」が6回生男子2名、「地理学特講」が3回生男子4名、3回生女子4名、2回生男子3名となった。また、大学院の「人文地理学特論」は、修士3回生女子2名、修士2回生女子1名、修士1回生男子1名、修士1回生女子4名となった。

事前学習会は、新型インフルエンザで開催中止や日程変更を余儀なくされた昨年度と異なり、全て予定通りに実施することが出来た。事前学習会では、全ての学部学生に地理学や街づくりに関する学術論文を1本読ませ、その書誌情報(本稿末尾の「参考文献」欄の書式)と内容の要約をA4用紙で1枚以内にまとめさせ、その紹介を10分以内で行わせた。スタイルを整えて書誌情報を提示することは、分野を問わず論文執筆に役立つため、卒業論文を作成する際に活用できる。また、多くの学生諸君は口頭発表の資料作りが不得手で、必要以上の文字を散文的に書き連ね、それを棒読みする傾向が強い。こうした学生たちにとって、A4用紙1枚に発表内容をまとめるのは難しかったようである。しかし、限られたスペースで要約を記すことは、いかなる職業に就こうとも求められる素養であるし、意義のあることであつたと思う。実際に発表させてみると、受講学生の多くが3回生以上であるため、効率的に上手く発表する者が大半であつた。紹介された論文を列挙することは紙幅の都合で避けるが、多くの論文がCiNii(Nii論文検索ナビゲータ)で検索されたことが明らかで、このシステムでダウンロードできる都市計画関係の論文が大多数を占めた。

人文地理学会文献目録編集委員会編の『地理学文献目録』を使っただけの検索が多かった頃と比較すれば、自然科学的でページ数の少ない論文の紹介が増えている。これは少し視点を変えれば、地理学関係の情報提供が遅れている証左ともいえるが、『地理学文献目録』が第12集で廃刊されることになったため、今後は更に CiNii からのダウンロードが主流となろう。学生たちには、せめて CiNii から直接ダウンロードできる論文に安易に向かうのではなく、タイトルから関心の持てる論文を探し出し、図書館の相互複写システムを積極的に活用するなどの文献渉猟の努力をして欲しいものである。「相互複写システムは手間がかかる」と誤解されているようだが、通常は数日間で複写物が届けられるので、もう少し活用されてもよいシステムである。次年度からは、各学生の専門分野での卒業論文作成にも役立つことなので、相互複写システムを積極的に広報したい。

以上のような論文紹介は学部の受講生に限り課した。大学院生については、事前学習会に参加できる者は積極的にオブザーバーとして参加させたが、日中に常勤や非常勤で様々な仕事がある院生もいるため、大学院生には「人文地理学特論」としての課題を独自に課した。その課題は、現地行動に関わる交通や宿の手配、現地機関と交渉しての資料収集などである。これらは、教職に就く場合を想定した課題である。すなわち、郊外学習、研修旅行や修学旅行の際に役立つ基礎能力の育成を視野に入れたものである。交通や宿の手配は、実質的には旅行会社との交渉となったが、自己手配の自由旅行が学校現場では皆無に近いことを考えれば、旅行会社を介した手配作業の方がより実効的であるとも考えられる。ただ、それゆえに旅行前に支払いを済ませておく必要が生じ、今回は宿泊代や現地での諸費用を合算して受講学生一人当たり 22,000 円を事前学習会などで集金した。

なお、論文末尾に整理した参考文献は、受講学生が内容紹介をした論文に加え、担当者（香川）が現地での説明や解説に活用した文献も含まれている。より多くの労作がある一方、それを見逃している可能性も否定できないが、少なくとも今年度と同じ地域の地理学的なフィールドトリップを行う場合、大いに役立つ文献が列挙されていると自負している。こうした論文リストを提供することも本稿の目的の一つである。

Ⅲ. 現地実習の実施

1. 現地実習 1 日目—8 月 7 日(土)、晴れ、津和野町の最高気温 34.1°C (15 時、16 時)

実習の初日は、受講学生の出身地（実家）がまちまちであるうえ、前後の旅程を自分で立てたい者も珍しくないため、恒例により現地集合とした。今回は、津和野の「まちおこし」に少なからず貢献している JR 西日本の快速「SLやまぐち号」を体験するため、JR 新山口駅在来線口（改札外）に 10 時 25 分に集合した。これは、集合当日の朝 8:06 に京都を「のぞみ 99 号」で発てば間に合う（新山口着 10:14）よう配慮した時間設定である。京都府最南端に近い木津川市に暮らす著者が自宅近くの駅を 7 時過ぎに出て間に合う時刻であったため、早起きが苦手な学生諸君にも無理な時間ではなかったはずである。集合場所を新幹線口と勘違いしていた者も数名いたが、大学院生の協力もあり、事前配布したオリジナルのブックレットを持参した全員が 10:30 には揃った。この A4 サイズのブックレットは、一昨年度から作成し始めて好評であったため、今年度も継続することにしたものである。内容構成は、表紙がフィールドトリップで巡る地域の画像、それに続けて現地行動の概要（タイムテーブル）、宿舎情報、現地に必要な費用、現地行動後の課題を記し、これらに山口恵一郎編（1975）『日本図誌大系 9 中国』の必要部分を複写して綴じ込んだものである。余った部分には、石見銀山の概要や地図をリーフレットから一部加工のうえ転載した。

当日は抜けるような夏の晴天で、「SLやまぐち号」は定刻に新山口駅を出発した。道中、上り勾配で極端にスピードが低下し、勾配に弱い蒸気機関車の特徴を車内に流れ込む煤煙とともに満喫した。この日が新幹線も蒸気機関車も初体験という者もいて、当該学生にとっては一種の交通革命であったようだ。児童・生徒の夏休み期間中ということもあり、車内には空席も殆ど無く、この列車の観光客誘致に果たす役割の大きさを感じることができた（写真 1）。こうした効果については車内や下車後に受講生に口頭説明した。昼食は集合時にパンなどを持ち込むように指示した。これは、津和野到着後すぐに行動に移れるようにするためである。

津和野駅には定刻の 12:46 に到着した。ホームは下車した乗客で混雑していたうえ、写真を撮る学生諸君も多かったため、出札口の外で集合する旨を告げて各自で行動した。再集合ののち、津和野でのフィールドトリップ概要を説明し、最初の団体行動の折に邪魔になる手荷物をコインロッカーに入れさせた。ただ、津和野駅のコイン

ンロッカーは数が十分でなく、何名かの学生は後にレンタサイクルを借りる約束をして、駅前の店舗で荷物を預けた。各自が荷物を預けた後に再び点呼を取り、山肌の国道 9 号線バイパスルートを簡単に説明してから、商店街を歩いて殿町周辺に至った（図 1）。途中では、景観保全のための電柱地中化、歴史的建造物を模した郵便局のデザイン、城下町に特有の遠見遮断、商店街の店舗構成などについて説明した。津和野は小規模な市街地であるとはいえ、観光スポットが点在しており、各自が訪問したい施設も様々であると考えられたため、鯉が泳ぐ殿町の水路（写真 2）あたりで一時的に解散した。津和野駅での再集合は 16:40 であるため、現地での滞在時間は 4 時間弱に過ぎない。したがって、自由行動時間は実質的に 3 時間程度しかなく、限られた時間で効率的に行動することが求められた。自由行動時間中、受講生が漫然と散策しないように、後述する課題を与えておいた。受講生によるレポートの内容については次章に譲りたい。



写真 1 SLやまぐち号

写真は津和野から新山口へ向かう上り列車
(2010年8月7日、香川撮影)



写真 2 鯉が泳ぐ殿町の水路
津和野を象徴する観光地の景観
(2010年8月7日、香川撮影)

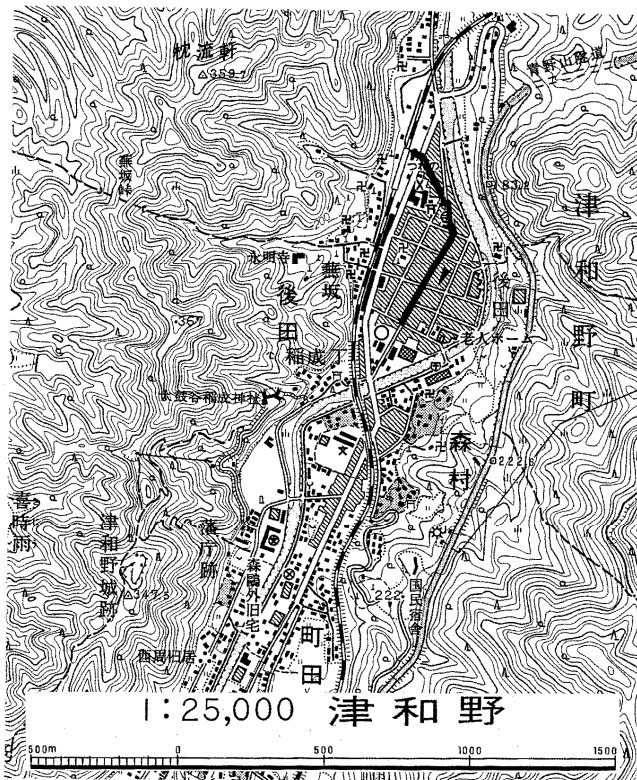


図 1 津和野における徒歩での団体行動コース
1/25,000 地形図「津和野」（平成 15 年 3 月 1 日発行）に一部加筆

再集合時には大半の学生が暑さに参っていたようであるが、津和野の落ち着いたたたずまいに満足した様子も感じられた。全員が揃っていることを確認して、津和野を 16:57 に発つ普通列車で宿泊地の益田に向かった。益田駅に到着後、予約しておいた宿泊先のマイクロバスに乗り込み投宿した。翌日の朝が早いうえ、炎天下での行動で疲れていた者が多かったためか、学生諸君も比較的早く眠りについたようである。

2. 現地実習 2 日目—8 月 8 日(日)、晴れ、萩市の最高気温 34.1℃ (13 時)

この日も快晴に近い天候で幸先良いスタートを切った。列車の時間の都合で宿舎では朝食を摂らず、益田駅の売店で各自に車中で食べる朝食を購入させた。益田駅は 7:50 に発ったが、単行(1 両編成) 運転のワンマンディーゼルカーに旅客需要の少なさを実感した。なお、東萩駅までの往復には、学生の運賃が半額になる学生団体割引運賃を活用した。この乗車券は購入手続きに手間を要するが、今回のような現地行動では旅費の大幅節減が可能になる。2008(平成 20)年の道南フィールドトリップ(香川 2009)でも使用した実績があるが、もう少し購入手続きが簡略化できないものか。移動の途中、晴れ渡った夏の日本海の美しさを堪能して、列車は定刻の 9:03 に東萩駅に到着した。到着後、全員が揃っているか確認して出札口から駅前に出た。この日も益田市の宿舎に連泊することになっていたため、受講学生は全員が身軽な格好で、前日の津和野のようにコインロッカーを探さずに済んだ。今回のようなエクステンシブ型フィールドトリップでも、可能な限り連泊する方が荷物運搬の面で圧倒的に有利である。

当初、ここから市街地中心部の萩バスターミナルまでは徒歩で移動する予定であったが、当日朝に確認した天気予報では当日の気温が 34℃を超えるのが確実視されていたため、体力の無駄な消耗を避けてバスを利用して萩バスターミナルに至った。この移動のバス料金をはじめ、バスでの団体移動、博物館等への団体入場は、すべて事前集金した財布から支出した。個々に乗車券を買うよりも効率的で他の乗客にも迷惑をかけ難いため、今後こうした方法を効果的に使っていきたい。

萩バスターミナルから萩郵便局、萩消防署、明倫小学校(写真 3)の順に団体行動で歩き(図 2)、2002(平成 14)年の東京フィールドトリップ(香川 2003)で受講生から大きな共鳴を得た、夏の道の歩き方を伝授した。すなわち、南北方向の道路は午前中に東側、午後には西側、東西方向の道路では終日南側を歩くという技法である。こうすることによって日陰を歩く時間がより多くなり、特に体力が十二分に発達していない小学生の引率では有効である。萩郵便局から明倫小学校にかけて公共施設が集積する地域は、多くの城下町起源都市の公共施設が城郭に隣接する武家屋敷地区に立地するパターンから外れている。その原因を、この地が土木工事の未熟な時代に水害を受けやすい低湿地であったこと、そのため都市的な土地利用の進展から遅れて広い用地が豊富に存在したことなどを説明した。また、今回のフィールドトリップの全体テーマである「歴史を活かした街づくり」の観点からは、訪問した各地で観察できた電柱地中化や建物デザインの工夫について説明した。この時点で、既に気温がかなり上昇してきており、疲労の色を滲ませる受講生もいたため、中央公園の山県有朋像を經由して、萩城下町(写真 4)の一面にある萩博物館に急いだ。



写真 3 明倫小学校の木造校舎
整然と並ぶ木造校舎が歴史を醸し出している
(2010 年 8 月 8 日、香川撮影)



写真 4 萩城下町の土塀
武家屋敷の形成当初から土塀の築造が求められた
(2010 年 8 月 8 日、香川撮影)

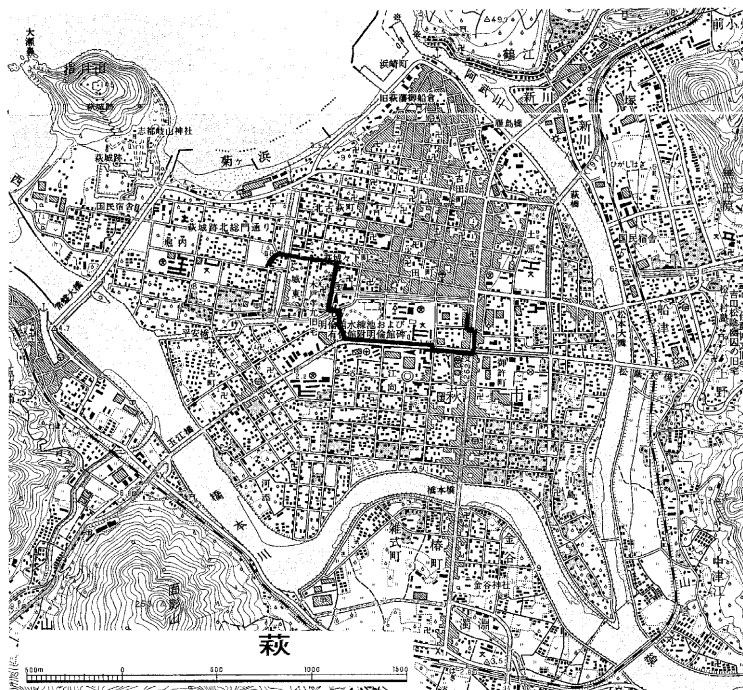


図 2 萩における徒歩での団体行動コース

1/25,000 地形図「萩」(平成 15 年 6 月 1 日発行) および

1/25,000 地形図「越ヶ浜」(平成 12 年 9 月 1 日発行) に一部加筆のうえ、62%に縮小

萩博物館には、事前集金の財布から支出して団体入場券で入館した。博物館の館内では各自が時間をかけて見たいものが様々であることが自明であったため、入館後すぐに自由行動にすることは入館前に告げていた。その後の昼食や市街地の訪問スポットも個人またはグループ任せである。今回は歴史学を専門とする学生諸君が多かったため、史跡が多い萩では自由行動を保障した意義は大きかった。各自の訪問先は後述するレポート課題に記すよう指示していたため、受講生は相応の緊張感をもって自己流のミニエクスカーションを設計したようである。この詳細については次章に譲る。また、2日目夜の恒例行事である打ち上げコンパを夕食と兼ねて催した。最近の学生諸君は無茶な飲み方をする者が減ったうえ、翌朝の行動開始が早いことを受講学生の全員が心得ていたため、楽しく愉快に過ごすことができた。

3. 現地実習3日目—8月9日(月)、晴れ、大田市の最高気温 33.7°C (15時)

列車の時間の関係で、この日も宿舍で朝食を摂らず、慌しくチェックアウトして送迎バスで益田駅まで届けてもらい、駅の売店でパンなどを買い込む朝になった。益田駅を発ったのが 7:44 の快速列車で、同列車は最終日の目的地の石見銀山への玄関口である大田市駅に 9:28 定刻で到着した。昨年末の下見の時点で 9:32 に世界遺産センター行きのバスが接続していたが、今回のように 20 名を超過する団体行動では乗車は不可能であった。しかし、夏季であることもあって、9:52 のバスを利用することができた。駅前の石見交通バスの事務所で団体乗車券を購入できたことも幸いであった。世界遺産センターへの路線バスは、公立病院の玄関、バイパスから逸れて旧集落を経由したりするため、自家用車利用と比べれば目的地までの時間を要するが、地理学のフィールドトリップには最適な教材にもなり得る。こうした生活に密着したルート設定が公共交通機関の大切な役割であること、バイパスが設けられた旧集落は電柱と電線がありバイパスの多くにはそれが無いことなど、地域観察のキポイントの例を下車後に説明し、帰路に注視するように指示した。何となく覚えているが強く印象に残っていない点を指摘することで、学生たちが多くを学べることは従来の経験で分かっていたからである。

世界遺産センターはインフォメーションセンターと博物館を兼ねた素晴らしい施設である。ここで1時間ほどの見学時間を確保し、著者は受講学生が観覧する中を巡回した。益田から列車とバスで3時間近い移動を経た後なので空調が整った館内では休息も得られたはずである。我われは当初、世界遺産センターを 11:30 に発って大

森（石見銀山の徒歩観光の拠点の一つ）に移動することにしていたが、このバスが混雑していることが分かったため、全員が揃っていることを確認して、僅かに先行するバスに乗車して大森停留所で下車した（図3）。乗車に先立っては、世界遺産センターの駐車場で観光客の自動車を収容し、そこからバスで移動するパーク&ライドを実施していることを説明したが、先への期待からか説明は空振りに終わったようだ。バスの団体乗車券は大田市駅前の事務所で購入済であったため、上下車で他の乗客に迷惑をかけることは最小限にできた。下車後に点呼を取り、銀山公園の一面の日陰を再集合場所に指定してから、昼食のための約1時間の休憩を設定した。これは、食事ができる大規模な店舗が周辺に無いことを昨年末の下見で確認していたため、少人数のグループに分かれての行動を取らせる工夫である。再集合時間は12:30であったが、食事の場所が分散していたため、一部のグループから途中で合流するとの連絡が携帯電話で入った。このグループを除いた全員が集合していることを確認して、いよいよ予約無しで見学できる石見銀山のハイライト「龍源寺間歩」に向けて歩みだした。

銀山公園から龍源寺間歩までは約2kmの距離であるが、最初はなだらかな上り、目的地近くでは少しきつい上りになるため、受講学生の中には苦しかった者もいたようである。ゆっくり歩き過ぎると逆に疲れることも教唆したが、無理は禁物なので先導していた著者は通常フィールドを歩いている自分のペースをスローダウンした。結局は45分ほどで最後のグループが龍源寺間歩の入場券売場に到着した。龍源寺間歩の中は、かがまなければ頭を打つような箇所もいくつかあったが、ほの明るく照らされた岩肌の輝きはリアリティに富んでおり、ところどころで照らし出された鉱脈を掘り進んだ跡も見学者に配慮したものであった。何よりも坑内の気温が20℃で涼しかったことは、炎天下を歩いてきた一行には最高の贈り物であった。最後に緩やかなスロープを上るうちに気温の上昇を感じていると出口に到達した。坑内が涼しかったとはいえ、中腰で進む箇所も多かったため、出口のところの広場で小休止して次の行動に備えた。



写真5 清水谷精錬所跡
産業遺跡として価値のある景観
(2010年8月9日、香川撮影)



写真6 大森集落（駒足付近）の景観
随所に景観保全への工夫が見られる
(2010年8月9日、香川撮影)

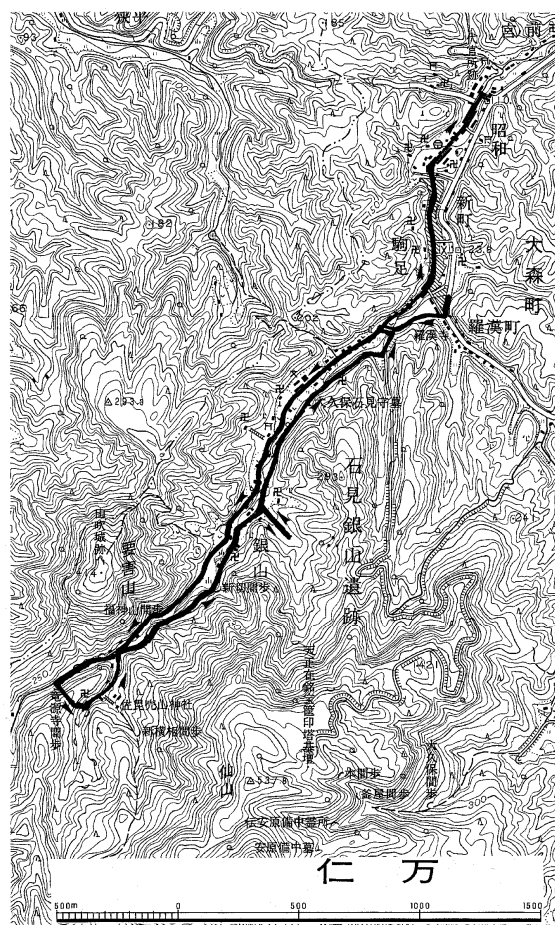


図3 石見銀山における徒歩での団体行動コース
1/25,000 地形図「仁万」（平成12年6月1日発行）に一部加筆のうえ、80%に縮小

龍源寺間歩からは下り坂であるため足取りも軽く歩みを進めた。経路は木陰を求めて銀山川右岸の遊歩道を通った。途中で清水谷精錬所跡(写真5)に立ち寄ったが、ここは昨年末の下見時に産業遺跡としての大きな価値を見出していたため、今回もぜひ訪問したい場所の一つであった。閉山後に良い状態の遺構が残り、それが植物で程よく風化されながら残存するさまは、石見銀山の世界文化遺産登録に際しても大きな貢献をしたはずである。ただ、ここは遊歩道からは短いとはいえ急な上り坂を経なければ到達できないうえ、精錬所遺構の上までは一層の体力消耗を求められる。そのため、受講学生が炎天下の行動で体力を喪失してしまい、その後の大森集落(写真6)の観察が疎かになってしまった(淡々と歩くという状態であった)のは惜まれる。現在の学生諸君の多くは、空調が整った住居や教室で育った世代であるので、特に夏の暑い時期の野外活動では体力の無さを露呈する者が多い。コンビニエンスストアや自動販売機で歩みを止める者も珍しくない。しかし、夏季の野外活動では熱中症に代表される脱水症状に万全の注意を払う必要があるため、そうした場所ではさりげなく休憩を取ることも大切である。

大森代官所跡で乗車するバスに先立つ集合時刻を指示して15分ほどの休憩をとった。山間部でもあるため、日陰に入るとヒグラシの鳴き声を乗せて抜ける微風が緑陰に心地良かった。大森代官所跡を15:07に発車する帰路のバスは超満員で、積み残しが出ないか心配になるほどであったが、何とか受講学生の全員が乗車できた。車内で著者の近くに居た数名の学生が「幹線側に電柱が無いので、ここがバイパスから外れて旧集落を抜ける場所ですね」と尋ねてきたが、こうした観察力が定着していることは喜ばしことである。大田市駅に到着後、駅前でフィールドトリップの簡単なまとめを話し、コインロッカーから荷物を出すのを忘れないように指示してからグループを解散した。8月9日という暦のこともあり、ここから郷里へ直行する学生も数名いた。帰路する者は二度の乗換えを経て20:51に無理なく京都駅に着くことができたはずである。

IV. レポート課題の分析—むすびに代えて—

受講学生に与えたレポート課題は、全員に課したAとBに加え、事前学習会の出席状況に応じて欠席が1回以上の者に課した論文講読とまとめ作業の補足課題である。補足課題は欠席回数に応じて、読むべき論文の数で調整を図った。これらの課題は、8月21日の深夜を締め切りとしてメール添付(携帯メールからは不可)で提出させたが、全員が締め切りまでに課題を提出した。ごく一部の課題が整えられなかった受講学生については減点対象とした。各々の課題について記す。課題を提出させた受講学生は、学部が全員(13名)、大学院が昼間勤務で市役所に勤務する1名であった。

【課題A】津和野または石見銀山で印象に残った「歴史を活かしたまちづくり」の感心点と問題点を紹介し、問題点を改善するためになすべきことを1500字(A4版にレイアウトすること)以内で述べよ。

【課題B】萩市街地で自由行動時に巡ったコースを簡潔にまとめ、その中で最も印象に残った場所とその理由を800字(A4版にレイアウトすること)以内で述べよ。

【補足課題】妻木ほか(2009)、足立(2007)、高須(2009)を順に読み、その感想文を各800字以内で述べよ。欠席が1回の者は妻木ほか(2009)のみ、欠席が2回の者は足立(2007)まで、欠席が3回以上の者は高須(2009)までを読むこと。

補足課題は、妻木ほか(2009)が萩城下町における17世紀の景観政策に関する論考、足立(2007)が歴史的観点から見た石見銀山の世界遺産登録をめぐる論考、高須(2009)が地学的な観点に立脚する石見銀山の観察方法についての提案である。

最初に課題Aについて述べる。ここでは、津和野または石見銀山のいずれかを取り上げることを指示していたが、提出された課題のうち石見銀山を取り上げた者は僅か1名、津和野を中心として石見銀山と比較した者が2名、その他の11名は津和野のみを扱っていた。まず取り上げた者が少なかった石見銀山については、3人全員が間歩などの坑道遺跡そのものよりも大森集落やその周辺について感心したと述べており、「歴史を活かしたまちづくり」のうちの「まち」が市街地をイメージさせたと考えられる。石見銀山の問題点と改善点に関しては、大幅に徒歩交通に依存するルートが特に高齢者にとってバリアフリーの観点から難点であるとの指摘が漏れなくなされた。ただ、こうした整備は世界遺産としての保全状態を悪化させたり、遺跡そのものの価値を低下させ

る恐れもあるので、いわば両刃の刃のような問題といえる。現代日本は、既に高齢化社会から高齢社会へと移行している。こうした環境の下、バリアフリーの緩和と遺産の保全の両立は今後の石見銀山において喫緊かつ最重要の課題となろう。

他方、津和野については、全員が感心点として電柱地中化や建物デザインの工夫など、都市計画上の取り組みを指摘していた。公共交通の便の悪さを克服するためにレンタサイクルが活用されていることも数名の者が感心点として指摘していた。反面、問題点については、総じて「観光スポットの点在が歩く観光に不向きである」という指摘が優勢であった。今回は暑い時期であったため、とりわけ歩くのに骨が折れたという事情はあろうが、津和野のような「和」の趣を基盤にした観光地は、おおむね年配の観光客が多い。そのことを踏まえれば、季節を問わず「歩く観光」に向けた仕掛けが街中に必要であろう。また、「日帰り客が優勢で宿泊客が少なそう」との指摘が「宿泊客が少なければ観光に対する消費額の少なさに直結してしまう」という観光地理学あるいは地域経済学的な観点からの指摘も得られた。宿泊客を増やすための方策として提案された、ライトアップや花火大会などはハードとソフトの両面が必要で生易しい取り組みではないだろうが、一考の余地があるのではなかろうか。

次に課題Bについて記す。この課題に関わる自由行動については、14名分を表1にまとめた。この表を一瞥すると、単独行動かグループ行動かが不明な大学院生1名を除いて、残りの学部生は全員が同学年で同性の者とグループ行動をしていたことが明らかである。なお、3回生の女性が2つのグループになっているのは、所属が教育学専攻と社会領域専攻とに分かれるためであろう。また、多くのグループは、限られた時間の中で行動範囲がかなり広い。それは、萩博物館で一解散の後に東萩駅まで一旦戻ってレンタサイクルを借りて巡ったグループや、1回あたり100円で利用できる循環バス「松陰先生」「晋作くん」を利用したグループが多いからである。時間的な制約のため循環バスのダイヤでは不十分で一部の区間ではタクシーを活用したグループもあったようだが、このような臨機応変の工夫を学生たちが自らの意思でしてくれることには頼もしさを感じる。訪問先としては、人物的に萩の象徴にもなっている吉田松陰ゆかりの地が人気を集めているが、「最も印象に残った場所」としては、女性がストーリー性や歴史性を重視した「人」の絡む場所（たとえば松陰神社、野山獄跡・岩倉獄跡）を指摘する傾向にあるのに対し、男性は「歴史を現代に反映する」ような「モノ」（たとえば浜崎地区）について高く評価する傾向が見出せる。こうした性差は、受講学生の属性を精査したうえで、団体行動を設計する場面などで参考にできよう。

表1 萩における自由行動での訪問先

地区	↓スポット	学生の属性→														
		Mf31	Bm61	Bm62	Bm31	Bm32	Bm33	Bm34	Bf31	Bf32	Bf33	Bf34	Bm22	Bm22	Bm23	
萩城下町	萩城下町武家屋敷地区	○												○	○	△
	萩城跡(指月公園)		●	○	○	○	○	○			○	○	●	○	○	
	志都岐山神社				△	△	○	△								
	石彫公園		△	○												
	女台場								○	○						
萩	菊ヶ浜海水浴場		○	●	○	△	○	○								
	浜崎地区(旧萩藩御船蔵など)				●	●	●	●					○	○	●	
旧松本村	吉田松陰誕生地・墓所	○														
	松陰神社・松下村塾	●			○	○	○	○	○	○	○	●	○	●	○	
	郡司鑄造所遺構広場				△	△	○	△								
	伊藤博文旧宅・別邸	○							○	△	○	○	○	○	△	
	玉木文之進旧宅	○														
中心街	東光寺				○	○	○	○								
	前原一誠旧宅										○	○				
	萩おみやげ博物館								○	○						
南	野山獄跡・岩倉獄跡								●	●	●	○				
	萩駅												△	△	○	

資料:受講生が提出した成績評価用のレポート。

地区の名称は、本稿著者(香川)が命名したもの。
 学生の属性:Mは大学院修士課程、Bは学部を指す。
 mは男子学生、fは女子学生を指す。
 10の位の数字は学年、1の位の数字は個別番号を示す。
 ●:最も印象に残った場所(レポートに記載)、○:訪問した場所(レポートに記載)、
 △:訪問したと推定される場所(レポートに記載無し、グループ行動から類推)。

補足課題は全員に課したのではないが、指定どおりに簡潔にまとめられたレポートが大勢を占めた。これらの論文は現地行動の前に読破していれば一層役立ったのであろうが、レポートの文面から判断して大半の者が現地行動の後で追体験的に読んでいたことが分かった。今後は、現地行動の最初の集合時に補足課題を提出させるなどの改善策をとることが必要である。

なお、かつて現地行動を伴う科目の成績評価は「優」が暗黙の了解のような時期もあったが、著者は講義だけの科目も含めて「良」を基準にした厳密な評価を心掛けている。今回は、事前学習会の出席状況、事前学習会での発表と質問、現地行動での積極性、レポートの内容などを資料として、シラバスに記した評価基準に準拠した成績評価を行った。結果、学部（1～3回生「地理学特講」、6回生「地理学臨地実習」）については、秀：0、優：8、良：3、可：2、不可：0となり、大学院（全回生「人文地理学特論」）については、秀：1、優：4、良：3、可：0、不可：0という成績分布になった。

以上のように、津和野・萩・石見銀山におけるフィールドトリップの実施記録をまとめた。今回のコースは、歴史や産業に関する多くの見どころに富んでおり、仮に小学校の修学旅行が6年生に2泊3日で実施されるならば、近代日本に大きな影響を与えた森鷗外や西周ゆかりの津和野、幕末の志士や偉人に彩られた萩、近世日本の財政基盤の一端を担った石見銀山など、学ばせるべきものに満ちている。今日ではインストラクター任せで教員が相対的に楽なスキー修学旅行、海外体験を旗印にした私立小学校の海外修学旅行も珍しくなくなっているが、自国の地理・歴史・文化を深く理解することは、学習指導要領に照らし合わせても看過できない学習活動である。こうした観点からフィールドトリップで巡る地域を観察する（させる）ことも、教員養成系大学・学部での地理学教育では大切な取り組みであろう。

大学のカレンダーとの関係で実施時期が8月上旬にならざるを得ないため、フィールドでは酷暑との戦いを余儀なくされるが、帰洛後に受講学生と話をすると、暑さが思い出の一つになって授業の印象を深めていることも事実である。暑さ対策にも配慮しながら、また新たな対象地域を探す仕事が始まる。次年度シラバスの執筆までの時間は長くない。

付 記

本稿の骨子は、2010年度近畿都市学会秋季大会（於、京都市立堀川音楽高等学校）において発表した。

参 考 文 献

- 足立克己（2007）「世界遺産石見銀山遺跡とその文化的景観」、月刊考古学ジャーナル、512、pp.7-12.
- 有川智子・西山徳明・吉村重昭（2005）「歴史的都市における景観要素の変容に関する研究—山口県萩市を対象として—」、日本建築学会学術講演梗概集（近畿）、2005-9、pp.347-348.
- 福留 強（1993）「まちづくり探訪記（4）—島根県津和野町ふるさと津和野鷗外塾—」、社会教育、48-3、pp.62-65.
- 原田真宏・宮本雅明（2001）「萩市浜崎における町家の配置形式と建築形式—萩市浜崎の町家と町並みに関する史的考察（1）—」、日本建築学会九州支部研究報告、40、pp.449-452.
- 林 泰州（2008）「地域レポート 石見銀山のまち『大森』の町並み保存20年」、まちづくり、17、pp.106-111.
- ジェイアール東海エージェンシー（2007）「世界に名を馳せた里—石見銀山遺跡—」、ひととき、7-3、pp.12-33
（当該特集記事の中に以下の論考が格納されている。立松和平『『銀山王国』と称された面影』、岩中祥史「石見人の気質をはぐくんだ銀山文化」、小泉和子「全てを大切に残して、今—石見の女たちの心映え—」、松田純子「この町に住む幸せ」）.
- 香川貴志（2003）「東京を歩く—地下鉄銀座線沿線のフィールドトリップ、平成14(2002)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、3、pp.27-38.
- 香川貴志（2005）「道央探訪—平成16(2004)年度『地理学臨地実習』『地域環境学臨地実習』の覚え書き—」、京都教育大学教育実践研究紀要、5、pp.33-43.
- 香川貴志（2007）「長崎ば、さるかんね—平成18(2006)年度『地理学特講（地理学臨地実習）』『地域環境学臨地

- 実習』の覚え書き―、京都教育大学教育実践研究紀要、7、pp.1-10.
- 香川貴志（2009）「函館・札幌・小樽のエクステンシブ型フィールドトリップ―平成 20(2008)年度『地理学特講（地理学臨地実習）』『地域環境学臨地実習』の覚え書き―、京都教育大学教育実践研究紀要、9、pp.1-10.
- 香川貴志（2010）「歩くぞなもし城下町―松山市街地のフィールドトリップ、平成 21(2009)年度『地理学特講（地理学臨地実習）』『地域環境学臨地実習』の覚え書き―、京都教育大学教育実践研究紀要、10、pp.13-22.
- 柿原芳章・村上佳代・西山徳明（2009）「歴史文化基本構想および歴史まちづくりと萩まちじゅう博物館構想の比較分析―それらの特徴と関係性について―」、日本建築学会九州支部報告書、48、pp.393-396.
- 川村博忠（2009）「現存『正保石見絵図』の成立に関する考察―津和野・シーボルト・松本諸本の比較を通して―」、エリア山口、38、pp.1-8.
- 川崎 茂「大田」、(所収；山口恵一郎編『日本図誌大系 9 中国』、朝倉書店)、pp.82-85.
- 菊地達夫（2004）「伝統的建造物群を活用した観光空間の基盤とその特色―山口県萩市と島根県津和野町の場合―」、「生涯学習と実践」（北海道浅井学園大学）、7、pp.187-201.
- 菊屋嘉十郎（1973）「城下町萩の町並み保存の経過とこれから」、建築雑誌、1074、pp.1321-1323.
- 松本亜矢（2008）「石見銀山遺跡を核とした新たな観光ルート形成と滞在型観光への展望」、島根県地理学会誌、41、pp.21-31.
- 中島義一（1975）「津和野」、(所収；山口恵一郎編『日本図誌大系 9 中国』、朝倉書店)、pp.104-105.
- 中島義一（1975）「萩」、(所収；山口恵一郎編『日本図誌大系 9 中国』、朝倉書店)、pp.386-389.
- 中田健一（2009）「『石見銀山遺跡とその文化的景観』の世界遺産登録」、明日への文化財、61、pp.23-32.
- 中尾明日美・西山徳明（2003）「伝建地区における景観要素としての塀垣の保存・整備に関する研究―山口県萩市堀内地区を対象として―」、日本建築学会九州支部研究報告、42、pp.253-256.
- 西尾俊和（2009）「世界遺産に登録された『石見銀山遺跡とその文化的景観』について―『石見銀山大久保間歩一般公開限定ツアー』に参加して―」、土木學會誌、94-1、pp.50-53.
- 野本晃史（1981）「小京都のまちづくり―津和野―」、地理、26-5、pp.42-48.
- 小田憲謙・西山徳明（2000）「歴史的町並みの景観特性の把握とその変容に関する研究―萩市浜崎地区を事例として―」、日本建築学会九州支部研究報告、39、pp.373-376.
- 大國晴雄（2008）「石見銀山遺跡の文化的価値と世界遺産登録への歩み」、地盤工学会誌、56-12、pp.4-6.
- 品川汐夫（2002）「山口県萩市大島漁協における漁獲物組成の経年変化と海水温の上昇について」、下関短期大学紀要、19・20、pp.23-34.
- 杉谷光明（1981）「石見銀山」、地理、26-11、pp.87-89.
- 高須佳奈（2009）「石見銀山の正しい観光の仕方」、Rika Tan（理科探検）、3-7、pp.18-21.
- 妻木宣嗣・曾我友良・橋本孝成（2009）「17 世紀、萩の武家居住地域における街路空間に関する研究」、日本建築学会計画系論文集、642、pp.1831-1837.
- 和田和夫（2007）「いまふたたび銀の道から世界へ―石見銀山遺跡の整備と世界遺産登録―」、新都市、57-9、pp.47-52.
- 渡部孝幸（2010）「世界遺産の町・石見銀山を守る」建築/保全、31-3、pp.44-48.
- 矢ヶ崎善太郎（2007）「島根県津和野町旧畑ヶ迫村における鉦山師・堀家の建築の動向と大工について」、日本建築学会近畿支部研究報告集、47、pp.837-840.
- 山口 瞳（2002）「山口県萩市における明治期の社会構成と教育施設」、日本建築学会関東支部研究報告書、9-2、pp.437-440.